

源氏物語

鈴虫

紫式部

青空文庫

すずむしは釈迦牟尼仏のおん弟子の君
 のためにと秋を浄むる
 (晶子)

夏の蓮の花の盛りに、でき上がった入道の姫宮の御持仏の供養が催されることになった。御念誦堂のいつさいの装飾と備え付けの道具は六条院のお志で寄進されてあった。柱にかける幡なども特別にお選びになった支那錦で作られてあった。紫夫人の手もとで調製された花机の被いは鹿の子染めを用いたものであるが、色も凶柄も雅味に富んでいた。帳台の四方の帷を皆上げて、後ろのほうに法華経の曼陀羅を掛け、銀の華瓶に高く立華をあざやかに挿して供えてあった。仏前の名香には支那の百歩香がたかれてある。阿弥陀仏と脇士の菩薩が皆白檀で精巧な彫り物に現わされておいでになった。闍伽の具はことに小さく作られてあって、白玉と青玉で蓮の花の形にした幾つかの小香炉には蜂蜜の甘い香を退けた荷葉香が燻べられてある。経巻は六道を行く亡者のために六部お書かせになったのである。宮の持経は六条院がお手ずからお書きになったものである。これを御仏への結縁としてせめて愛する者二人が永久に導かれたい希望が御願

文に述べられてあつた。朝夕に誦どくじゆ誦される阿弥陀経は支那の紙ではもろくていかがかと思おほしめ召され、紙屋川の人をお呼び寄せになり特にお漉すかせになつた紙へ、この春ごろから熱心に書いておいでになつたこの経卷は、片端を遠く見てさえ目がくらむ気のされるものであつた。罫けいに引いた黄金の筋よりも墨の跡がはるかに輝いていた。軸、表紙、箱に用いられた好みの優雅さはことさらにいうまでもない。この巻き物は特に沈しんの木の華足げそくつくえの机に置いて、仏像を安置した帳台の中に飾つてあつた。堂の準備ができて講師が座に着き行ぎ香ようこうをする若い殿上人などが皆そろつた時に、院もその仏間のほうへおいでになろうとして、尼宮の西の庇ひさしのお座敷へまずはいつて御覧になると、狭い氣のするこの仮のお居間の中に、暑いほどにも着飾つた女房が五、六十人集まつていた。童女などは北側の室へやの外縁にまで出ているのである。火入れがたくさん出されてあつて、薰香たきものをけむいほど女房たちが煽あおぎ散らしているそばへ院はお寄りになつて、

「空そらだきというものは、どこで焚たいているかわからないほうが感じのいいものだよ。富士の山頂よりもつとひどく煙の立っているなどはよろしくない。説教の間は物音をさせずに静かに細かく話を聞かなければならないものだから、無遠慮に衣きぬす擦れや起たち居の音はなるべくたてぬようにするがいい」

などと、例の軽率な若い女房などをお教えになった。宮は人気ひとけに押されておしまいになり、小さいお美しい姿をうつ伏せにしておいでになる。

「若君をここへ置かずに、どちらか遠い部屋へやへ抱いて行くがよい」

とまた院は女房へ注意をあそばされた。北側の座敷との間も今日は襖からかみ子こがはずされて御簾仕切りにしてあったが、そちらの室へやへ女房たちを皆お入れになって、院は尼宮に今日の儀式についての心得をお教えになるのであったが、その方を可憐かれんにばかりお思われになった。昔の鴛鴦えんおうの夢の跡の仏の御座みざになつている帳台が御簾越しにながめられるのも院を物悲しくおさせすることであつた。

「こんな儀式をあなたのためにさせる日があるうなどは予想もしなかつたことですよ。これはこれとして来世の蓮はすの花の上では睦むつまじく暮らそうと期していてください」と言つて院はお泣きになった。

蓮葉はらすばを同じうてなど契りおきて露の分かるる今日けふぞ悲しき

硯すずりに筆をぬらして、香染めの宮の扇へお書きになった。宮が横へ、

隔てなく蓮の宿をちぎりても君が心やすまじとすらん

こうお書きになると、

「そんなに私が信用していただけないのだろうか」

笑いながら院は言っておいでになるのであるが身にしむものがある御様子であった。

例のことであるが親王がたも多く参会された。六条院の夫人たちから仏前へささげられた物の数も多かった。七僧の法服とか、この法事についての重だつた布施は皆紫夫人が調製させたものである。綾地の法服で、袈裟の縫い目までが並み並みの物でないことを言つて当時の僧がほめたそうである。こんなこともむずかしいものらしい。

講師が宮の御遁世を讚美して、この世におけるすぐれた栄華をなお盛りの日にお捨てになり、永久の縁を仏にお結びになつたということを、豊かな学才のある僧が美辞麗句をもつて言い続けるのに感動して萎たれる人が多かった。今日のはただ御念誦堂開きとしてお催しになつた法会であつたが、宮中からも御寺の法皇からお使いがあつて、御誦經の布施などが下されてにわかには派手なものになつた。初めの設けは簡単にしたように院は

思^{おほしめ}召しても、それは決して並み並みの物でなかった上、宮廷の御寄進が添ったので、出席した僧たちは、置き所もない布施を得て寺へ帰った。

御出家をあそばされた今になって宮を院がごたいせつにあそばすことは非常で、無限の御愛情が運ばれていると見えた。御寺の帝^{みかど}は宮へ御分配になった邸宅へ今はもうお移りになるほうが世間体もよいとお勧めになるのであったが、六条院は、

「遠くなつては始終お目にかかることもできないので困ります。毎日お逢いしてお話ができた、あなたの用を聞いたりすることができなくなつては、私の期していたことが皆画^が餅^{べい}になつてしまう。そういつても私に残された命はもう何ほどでもないのでしょうか、生きている間はせめてその志だけでも尽くさせてください」

とお言いになつて賛成をあそばさないのである。院はまたそのほうの邸宅もきれいに修繕させてお置きになつて、宮が官から給されておいでになる収入や、御私有の莊園や牧から上がつて来る物の中でも、貯蔵しておく価値のある物は皆その三条の宮の倉庫^{くら}へ納めさせてお置きになつた。新しい倉庫の建て増しまでおさせになつて、それへは法皇がこの宮へ無数に御分配になつた貴重品の今まで六条院にあつたのを移してお蔵^{しま}わせになつた。これは永久に宮の御家を経済的に保証する価値ある財産といふべきものである。そして六条

院における宮の御生活とおおぜいの女房、男女の召使に要する費用は院の御負担とお決めになったのである。

秋になつて院は尼宮のお住居すまいの西の渡わた殿どのの前の中の堀へいから東の庭を草原にお作らせになつた。閼伽あかだな棚などをそのほうへお作らせになつたのが優美に見える。宮の御出家のお供をして乳母めのとそのほかの老いた女たちは必然的に尼になつたが、若盛りの人でも、他日動揺する恐れのない、信念の堅そうな人たちだけを御弟子にされることになり、われもわれもと希望する者の多いのを、院がお聞きになつて、

「群衆心理で今はその氣になつていようが、それをお許しになつてはいけませんよ。不純な者が少しでも混じつていては他の者の迷惑になりますよ」

と御忠告になり、全部の中から十幾人だけが尼姿で侍することになつた。今度の草原に院は虫をお放ちになつて、夕風が少し涼しくなるころに宮の所へおいでになり、虫の音を愛しておいでになるふうでしきりに宮を誘惑しようとしておいでになつた。今さらそうした行ないはあるまじいことであると、宮はただ恐ろしがつておいでになつた。人目には以前と変わらぬようにあそばしながら、あの秘密をお知りになつてからは、汚れたものとして嫌悪けんおをお続けになつた自分の肉体を悲しむ心が出家のおもな動機になり、尼になつた時

からはいつさいの愛欲を忘れることができ、静かな平和な心を楽しんでいる自分に、またこうしたことを求められるのは苦しいことであると宮は思いになり、六条院でない所へ住み移りたくおなりになるのであったが、これをはきはきと言っておしまになることもできぬ弱い御性質であった。

十五夜の月がまだ上がらない夕方に、宮が仏間の縁に近い所で念誦ねんじゆをしておいでになると、外では若い尼たち二、三人が花をお供えする用意をしていて、闍伽あかの器具を扱う音と水の音をたてていた。青春の夢とこれとはあまりに離れ過ぎたことと見えて哀れな時に、院がおいでになった。

「むやみに虫が鳴きますね」

こう言いながら座敷へおはいりになった院は御自身でも微音に阿弥陀あみだの大誦だいじゆをお唱えになるのがほのぼのと尊く外へ洩もれた。院のお言葉のように、多くの虫が鳴きたてているのであったが、その時に新しく鳴き出した鈴虫の声がことにはなやかに聞かれた。

「秋鳴く虫には皆それぞれ別なよさがあつても、その中で松虫が最もすぐれているとお言いになって、中ちゆうぐう宮が遠くの野原へまで捜しにおやりになってお放ちになりましたが、それだけの効果はないようですよ。なぜと言え、持つて来ても長くは野にいた調子には

鳴いていないのですからね。名は松虫だが命の短い虫なのでしょう。人が聞かない奥山とか、遠い野の松原とかいう所では思うぞんぶんに鳴いていて、人の庭ではよく鳴かない意地悪なところのある虫だとも言えますね。鈴虫はそんなことがなくて愛嬌のある虫だからかわいく思われますよ」

などと院はお言いになるのを聞いておいでになった宮が、

大かたの秋をば憂しと知りにしを振り捨てがたき鈴虫の声

と低い声でお言いになった。非常に艶で若々しくお品がよい。

「何ですって、あなたに恨ませるようなことはなかつたはずだ」

と院はお言いになり、

心もて草の宿りを厭へどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ

ともおささやきになった。琴をお出させになつて珍しく院はお弾きになった。宮は数珠

を繰るのも忘れて院の琴の音を熱心に聞き入っておいでになる。月が上がってきてはなやかな光に満ちた空も人の心にはしみじみと秋を覚えさせた。院は移り変わるこのすみやかな人生を寂しく思い続けておいでになって平生よりも深く身にしむ音をかき立てておいでになった。毎年の例のように今夜は音楽の遊びがあるであろうとお思いになって、兵ひょう部ぶ卿きょうの宮が来訪された。左大将も若い音楽に趣味を持つ人々を伴って参院したのであるが、こちらの御殿で琴の音のするのを聞いて出て来た。

「退屈でね、わざとする会合というほどのことではなしに、しばらく聞かれなかつた音楽を人が来て聞かせてくれないだろうかと思つて、誘い出すことが可能かどうかと、まず一人で始めていたのを、よく聞きつけて来てもらえたね」

と院はお言いになった。宮のお席もこちらへ作らせてお招じになった。今夜は御所で月見の宴のあるはずであつたのが、中止になつて寂しがっていた人たちが、六条院へだれかが集まつていると聞いて、あとからも来るのであつた。虫の声の批評をしたあとで、音楽の合奏があつておもしろい夜になった。

「月をながめる夜というものについても寂しくないことはないものだが、この中秋の月に向かっていると、この世以外の世界のことまでもいろいろと思われる。亡なくなつた衛門えもんの

督かみはどんな場合にも思い出される人だが、ことに何の芸術にも造詣ぞうげいが深かったから、こうした会合にあの人を欠くのはもののおいがこの世になくなった気がしますね」

とお言いになった院は、御自身の音楽からも愁うれいが催されるふうで涙をこぼしておいになるのである。御簾みすの中で女三によさんの宮みやが今の言葉に耳をおとめになったであろうかと片心たごころにはお思いになりながらもそうであった。こんな音楽の遊びをする夜などに最も多くだれからも忍ばれる衛門督であった。帝も御遊ぎょゆうのたびに故人を恋しく思召されるのであった。

「今夜は鈴虫の宴で明かそう」

こう六条院は言っておいでになった。杯が二回ほどめぐった時に、冷泉院れいぜいから御使みつかいが来た。宮中の御遊がないことになったのを残念がつて、左大弁、式部大輔しきぶのたゆうその他の人々が院へ伺候したのであって、左大将などは六条院に侍しているとお聞きになった院からの御消息には、

雲の上をかけはなれたる住家すみかにも物忘れせぬ秋の夜の月

「おなじくは」（あたら夜の月と花とを同じくは心知られん人に見せばや）とあつた。

「自分はたいそうにせずともよい身分でいて、閑散な御境遇でいらつしやる院の御機嫌きげんを伺いに上ることをあまりしない私の怠惰を、お忍びのあまりになつてくださったお手紙だからおそれおい」

と六条院はお言いになつて、にわかなことではあるが冷泉院へ参られることになつた。

月影は同じ雲井に見えながらわが宿からの秋ぞ変はれる

このお歌は文学的の価値はともかくも、冷泉院の御在位当時と今日とをお思い比べになつて、寂しくお思いになる六条院の御実感と見えた。御使いは杯を賜わり、御纏頭てんとうをいただいた。

参つていた人々の車を出て行く順序どおりに直したり、そちらこちらの前駆を勤める人たちが門内を右往左往するので、静かであつた音楽の夜も乱れてしまった。六条院のお車に兵部卿の宮も御同乗になつた。左大将、左衛門督さえもんのかみ、藤参議とうさんぎなどという人たちも皆

お供をして出た。皆軽い直衣姿のうしであったのが、下襲したかさねを加えて院参をするのであった。月がやや高くなって美しくふけた夜に、若い殿上人などに、わざとらしくなく笛をお吹かせになって、微行の御外出をされるのである。威儀の必要な時には正しく備うべきを備えて御往復になるのであるが、今夜は昔の光源氏の大臣のお気持ちで突然にお訪ねたすになったのであるから、冷泉院は非常にお喜びになった。御美貌びぼうの整いきった冷泉院と、六条院はいよいよ別のものとお見えにならなかった。まだ盛りの御年齢で御自発的に御位みくらいをお退きになった君に六条院は悲しみを覚えておいでになった。この夜できた詩歌は皆非常におもしろかったが、片端だけを例の至らぬ筆者が写しておくのもやましい気がしてすべてを省くことにした。明け方にそれらの作が講せられて、人々は早朝に院から退出した。

六条院は中宮のお住居すまいのほうへおいでになってしばらくお話しになった。

「ただ今はこうして御閑散なのですから、始終お伺いして、何ということもありませんが年のいくのとさかさまにますます濃くなる昔の思い出についてお話し、承りもしたいのを果たすことがなかなか困難です。出家をしたのでもなし、俗人でもないような身の上で、行動の窮屈な点があります。どちらにも私よりあとに志を起こして先へ進まれる求道者が多いのですから心細くて、思いきつて田舎いなかの寺へはいることにしようかともいよいよ近づ

ろは思われるのですが、あとの家族たちに関心をお持ちくださるようには以前からお頼みしていることですが、その時になりましたら^{あわれ}憐みをお垂^たれになつてください」

などと六条院はまじめな御様子でお語りになつた。今も若々しくおおよような調子で、中宮は、

「宮中住まいをしておりますところよりも、お目にかかります機会がだんだん少なくなつてまいりますことも、予期せぬことでございましたから寂しゆうございましたね。皆様が御出家をあそばすこの世というものから私も離れてしまいたい望みを持っておりますことにつきましても、御相談が申し上げたくてそしてそれができないのでございますわ。昔からどんなことにもお力になつていただきつけて、独立心がなくなつてるのでございませうね。御意見を伺わないでは何もできません私は」

と言つておいでになつた。

「そうですね。宮中にいらつしやるころは年に幾度かの御実家帰りを楽しんでお待ち受けることができたのですがね。ただ今では形式どおりのお暇をお取りになつて御実家住まいをなさることのおできにならなくなりましたのもごもつともです。もうお上^{かみ}とお后^{きさきぎ}と申すより一家の御夫婦のようなものですからね。ただ今のお話ですが、さして^{えんせい}厭世的にな

る理由のない人が断然この世の中を捨てることは至難なことでしょう。われわれでさえや
はりいよいよといえほどしば絆ほだしになることが多いのですからね。人真似まねの御道心はかえって誤解
を招くことになりまますから、断じてそれはいけません」

と院がおとめになるのを、宮は深く自分の心が汲くんでももらえないからであろうと恨めし
く思召した。母君の御息所みやすどころの靈が宙宇にさまよって、どんな苦しみを経験しておいでに
なることかとは中宮の夢寐むびにもお忘れになれないことで、今も人に故人を憎悪ぞうおさせるばか
りである名のりを物怪もののけが出てするということも六条院はあくまでも秘密にしておいでに
なったが、自然に人が噂うわさをしてお耳にはいつてからは、非常に母君を悲しく思召して、人
生そのものまでがいとわしくおなりになって、仮にもせよ御息所の物怪が言ったという言
葉を六条院からお聞きになりたいのであるが、正面から言うことはおできにならないで、
「お母様の靈魂が罪の深いふうに苦しんでおいでになりますことを私はほかから話に聞き
まして、それは確かでなくとも想像いたされることなのでございましたが、ただお死に別
れましたことだけを悲しんでおりまして、後世のことまでも幼稚な心の私は考えません
でしたのが悪いことでございます。気がついてみますと、宗教のほうの人にくわしい説
明もしていただきたくまりましたし、私の力で及ぶだけの罪の炎をお消ししてお救いもし

たいという望みも起こってまいったのでございます」

などとかすめたふうにしてお語りになるのであった。そういう御決心のできるのもごもつともであると哀れに院はお思いになつて、

「炎ののがれたいのを知りながら、愛欲の念をだれも捨てることができなものであるのです。目蓮もくれんが仏に近いほどの高僧になつていたために、すぐに母を地獄から救い出すこともできたのでしようが、その真似まねはおできにならないで、しかも御自身のはなやかな人間としての生活をしいて断ち切つておしまいになることも、知らず知らず煩惱ぼんのうを作る結果になるではありませんか。急いそがずにその道を御研究になることになさいますして、そのほかの方かた法ほうで故人の妄もうしゆう執しゆうを晴らさせておあげになることをなさるべきです。私自身もそれを十分に差し上げたい心を持つておりながら、ほかのことが多いものですから、そのうち私が本意を達する日が来れば、静かに私自身の手で冥福めいふくをお祈りしようと予定しているのですが、これも中途半端はんぱな心でしょうね」

などと言ひになつて、人生のはかなさ、いとわしきをお語り合ひになつているのであるが、まだどちらも出家するには御縁が遠いような盛りのお姿と見えた。

昨夜は微行の御参院であつたが、今朝けさはもう表だつて準太上天皇の儀式をお用いになる

ほかはなくて、院に参つていた高官たちは皆供奉ぐぶをして六条院をお送り申すのであった。

院は東宮の御母君の女御によしが御教育のかいに見える幸福な女性になっていることも、だれよりもすぐれた左大将の存在もうれしく思つておいでになるのであるが、その二人にお持ちになる愛は冷泉院をお思いになる愛の片端にも備あたいしないのである。冷泉院も常に恋しく思召しながらたやすく御会合のおできにならないことを物足らぬことに思召してただ今の御境遇を早くお選びにもなつたのである。中宮は御実家へお帰りになることが以前よりもむずかしくおなりになつて、普通の家の夫婦のようにいつもごいっしょにお暮らしになり、お催し事などは昔よりはなやかなふうにあそばされて、どの点から申しても御幸福なのであるが、母君の御息所みやすじころのこのために専心信仰の道へ進みたいと願ひもあそばされるのであつたが、だれも御同意にならぬことであつたから、せめて功德を作ることなで亡き靈を弔なぐさめたいというお考えになつて、以前にもまして善根をつもうと精進あそばされた。六条院も中宮のお志をお助けになつて、法華經ほけきょうの八講を近日行なわせられるそうである。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

鈴虫

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>